大迫元繁の社会教育論の研究
―米国留学とデモクラシーの受容を中心に―

文学部教育学科教授
関　　直規

日本語要旨

本稿は、1910年代後半から1920年代前半までの大迫元繁の社会教育論について、米国留学とデモクラシーの受容を中心に検討したものである。大迫は、慶應義塾大学の英語担当教授から、東京市初代社会教育課長に転じた。彼の著書・論稿を収集・分析した結果、以下の諸点が明らかになった。

第一に、大迫は、米国コロンビア大学に留学した。そこで得た見識と経験が、社会教育を論じる理論的枠組みとなった。

第二に、デモクラシーを重視した大迫は、その本質を人格主義と理解した。そして、個人生活と社会生活を統合する点に、社会教育の価値を定めた。その際、彼は、学校教育の問題点を指摘しつつ、社会教育の固有性を見出した。

第三に、大迫は、青年教育における「現在主義」を主張した。実生活と距離がある東洋の修養を批判し、西洋の長所である「積極主義」を、青年教育に適用した。

今日、社会教育の役割と独自性が問われている。国際的視野に立つ大迫の社会教育論は、グローバル化がますます進む世界に示唆的である。

キーワード：大迫元繁、積極主義、人格主義、デモクラシー、慶應義塾大学教授、東京市社会教育課長

目次

はじめに
Ⅰ　大迫元繁の生涯と著書・論稿
Ⅱ　米国留学とその影響
Ⅲ　大迫の社会教育論の特質

① デモクラシーと社会教育
② 学校教育批判と社会教育の固有性
③ 現在主義と青年教育
おわりに

はじめに

持続可能な社会づくりを進め、人々の主体的な生涯学習を支援する、地域における社会教育のあり方が問われている。横断的・総合的な教育行政の下、身近な拠点である社会教育施設には、他行政分野との一体的運営とともに、専門的役割が期待されている[(1)]。あらゆる人々の生涯にわたる学習権の保障や、社会教育の独自性の発揮という視点から、検討すべき課題は少なくない。本研究は、このような現代社会教育の深化に資する歴史的アプローチとして、大迫元繁の社会教育論を検討しようとするものである。

戦後の社会教育法制下で運営されてきた諸活動を創造的に発展させる上で、その原型である戦間期社会教育が内包していた歴史的意義を検討する原理的研究が欠かせない。このような課題意識に基づき、新海英行等は、乗杉嘉寿、小尾範治あるいは川本宇之介等、主要な文部省社会教育論者が、我が国の教育の現実を直視し、また、都市問題の調査研究を通じて、いかなる社会教育観を形成したのかの解明を試みてきた[(2)]。とりわけ、この中で、川本の「都市教育」論に関して、自治体教育行政の独自性を柱とする先駆的教育論と評価した点は、成果の一つであった[(3)]。他方で、川本の構想と東京市の教育の実態との齟齬の検討は、課題として残された[(4)]。また、小川利夫は、乗杉の社会教育行政論の現代的性格との関連で、東京市と大阪市の社会教育行政の意義に言及した[(5)]。これらの成果と課題を引き継ぐ上で、大迫元繁の社会教育論の検討は、不可欠である。大迫は、体系的に社会教育を論じた同時代の文部省社会教育論者とは異なり、東京市の初代社会教育課長という中間的・実践的指導者の立場に立ち、現場で社会教育分野を開拓したパイオニアであった。大迫に着目することで、戦間期社会教育史研究がより豊かなものになり、混迷する現代の社会教育が直面している諸問題を、歴史的文脈の中で認識する新しい糸口が得られる、と考える。

大迫は、1924年に初代宮崎市長となり、1927年までの任期中、財源対策、学校教育、都市計画等を進め、市の基盤づくりに努めた功績があり、今日では、大正・昭和時代前期の政治家として、一般に知られている[(6)]。東京市の社会教育課長時代に絞ると、関東大震災時の朝鮮人虐殺に反応した知識人の一人として、日本人の醜態を批判する大迫の論稿[(7)]に光を当てた、琴秉洞の研究がある。その中で、「朝鮮人問題については、実に出色の見である。東京市の幹部職員がこれ程までのことを書いたということに深い感銘を覚える。この人物がこの後どうなるのかは知る所ないが、この時に限って云えば立派と云える」[(8)]とし、彼の議論を

高く評価した。この点は、社会教育論の土台をなす人権的理解として注目されよう。さらに、大迫の社会教育論に限定すると、辻浩は、大迫の論稿[9]を取り上げ、社会事業の社会教育化の観点から言及した[10]。これらは、いずれも貴重な研究成果であり、それぞれの問題意識に基づき、大迫の意義を評している。しかし、彼の議論の全体を真正面から検証したものではないため、大迫の著書・論稿から読み取れる社会教育論の全体像は、必ずしも十分に明らかにされてこなかった。そこで、本研究は、大迫の論稿の発掘・研究に基づき、大都市社会教育の組織化に関連する、米国留学とデモクラシーの受容を中心に、彼の社会教育論を考察し、その基本的性格を明らかにするための基礎的作業を行うことを目的とする。なお、大迫の著作活動についての資料として、著書・論稿一覧を添付した。

本稿の構成は、以下の通りである。まず、Ⅰでは大迫の生涯と著書・論稿及びその特色について整理する。次いで、Ⅱでは、社会教育論への影響という観点から、米国留学を検討する。最後に、Ⅲで、大迫の社会教育論の特質を考察する。

Ⅰ　大迫元繁の生涯と著書・論稿

大迫は、1883年11月25日、源蔵の二男として、宮崎県に生まれた。1909年に明治学院大学神学科卒業後、1913年に、米国に留学し、1917年コロンビア大学よりマスター・オブ・アーツの学位を受けている。帰国後、1918年に、慶應義塾大学教授に着任し、英語を担当した[11]。1920年に、東京市に入市し、創設後間もない社会局初代労働課長に着任している。そして、後藤新平市長の下、1921年に社会教育課が新設されると、初代課長に就任する。社会教育分野の意義を明らかにし、創設後の事業開拓に中心的役割を果たした。特に、同課の主要な事業である市民音楽、市民体育や商工青年修養会等の実現は、大迫の社会教育論の具体化でもあった。また、社会教育課長時代には、東京市連合青年団の常務理事も務めている。

1924年、宮崎市長となるため退職するが、その後、再度、市に復職した。社会教育調査のため、米国、英領カナダを視察し、1935年、淀橋区長、1937年、市民動員部長、1938年、港湾部長・局長、1941年、経済局長等の要職を相次いで歴任した[12]。1942年には、陸軍司政長官に命じられたが、1944年、東京水産業会の初代会長に転じ、終戦後も東京都水産業会会長等を務めている。その後は、全国知事会事務局長となり、地方制度の改革に関わったが、1965年9月25日に他界した（享年81歳）。30代後半から50代までの働き盛りの約20年間にわたって、東京市の吏員として、市民生活の向上に力を尽した。その堅実な仕事ぶりは、「あらゆる関係方面の深甚周到なる研究調査と努力奮闘の賜物なり」[13]と評された。

大迫の主要著作は、社会教育課長時代の『青年に訴ふ』（実業之日本社、1923年）であろう。関東大震災の影響で、絶版となった同書を修正・改題したのが、『青年礼賛』（文省社、1924年）である。前著の巻頭に献辞として、後藤新平と松村介石の名が記されている。大迫

に影響を与えた人物である。そもそも、東京市の社会教育課の新設は、後藤新平市長の命によるものであった。それゆえ、後藤と大迫は、社会教育開拓という難事業をともに目指した関係にある。大迫は、「私は、亡くなった大政治家後藤新平伯の下に二、三年働いたが、後藤伯は語る可き多くの長所を持つて居た人であつた。…青少年に対すると、心が躍ると見えて全く人が変わつたやうに愉快になられるのが常であつた。云はば伯は大供であつたのである」[14] と、後藤に敬愛の念を抱いていた。この中の「大供」とは、「汝等、幼児の如くならずば天国に入ることを得ず」という聖句から得られた、大迫の人間理解である。義を忘れ、利にのみ狂奔する世の中で、赤子の心を失わず、希望に輝く小児の大なるもの、大人物を指しており、大迫の理想的な人物像であった[15]。

また、大迫が、「道会」や「道の会」を通じて、感化を受けたのが松村だった。大迫の初期の論稿の発表誌に、キリスト教系宗教団体「道会」の機関誌『道』、道徳団体「道の会」の機関誌『道話』が見られる。「道会」は、松村が1907年に創設した日本教会を起源とし、1912年に改称した宗教団体であり、会員が、信神、修徳、愛隣、永生の4綱領を奉ずることを目的とする。その活動は、日曜日の礼拝説教、講演会、『道』の刊行から成る。他方、松村が主宰し、1911年に発足した精神修養の会が、「道の会」である。その目的は、己の身を修め、己の職業に勉強し、人と国との為に尽くすことである。具体的活動は、講演会の開催と『道話』発行だった[16]。

大迫とこの二つの組織との関わりは、米国留学後に始まった。以前から道会の『道』を読み、その主張に共感していた大迫が、留学後に道会を訪問したことがきっかけとなり、初めて寄稿することになったという[17]。また、「道の会」では、講演会の講師をしばしば引き受けた[18]。寄稿という点では、大迫と両組織との関わりは、1923年頃まで続いた。大迫は、「知識欲や、信仰欲や、思想欲は、今や誰たるを問わず、民衆の胸に漲らんとして居る…『道話』の使命たる社会教育は、時勢の熱求して居る」[19] と述べている。松村の下で得た教養や講師の経験は、社会教育の意義や方法を考える糸口となった。そして、その経験が土台となり、後藤市長の下、社会教育課長の立場に就き、社会教育分野の本格的な開拓と拡充を目指すことになるのである。

主著『青年に訴ふ』は、青年向けの修養書であり、その大部分は、既発表論稿から成っている。大迫は、参考資料の著書・論稿一覧にあるように、120件を超える論稿を公にしたが、執筆したのは、本稿の考察対象である1910年代後半から1920年代前半にかけての、慶應義塾大学教授から東京市社会教育課長時代で、6割以上を占めていることがわかる。このことは、青年や市民対象の社会教育活動に従事することと、言論活動が重なり合っていたことを意味する。実践と理論が循環する中で、社会教育論が形成されていくのである。そこに影響を与えた経験が、米国留学であった。

Ⅱ　米国留学とその影響

大迫は、その生涯に二度渡米している。一度目は、1913年から1917年にかけてのニューヨーク市のコロンビア大学留学を中心とした時期である。具体的な研究テーマは不詳だが、「予は聊かながら歴史を研究し、事実に基く人生哲理を知らんと欲し、彼の国の講壇より之を聴かんと臨んだ」[20] と留学時代への言及があり、マスター・オブ・アーツの学位を取得している。この時の米国滞在期間は、5年以上にわたるもので、晩年、「様々なよい記憶が今に残っている。世話になった事、親切を感謝した事、感心した事等、沢山うれしい記憶を呼起すことが出来るが、不愉快な記憶などは殆ど妙に残っていない」[21] と肯定的にふり返っている。二度目は、東京市の社会教育調査の委託を受けた、1931年から1933年までの英領カナダ・米国の視察である。カナダのバンクーバー市から、米国シアトル市、ポートランド市、ロサンゼルス市やフェニックス市等を回っている。この視察の成果として、健康問題を中心に論じた「更生健康道」[22] をまとめた。大迫にとって、一度目の米国留学の影響は大きく、その時の経験や出来事を論稿で繰り返し紹介し、議論の材料とした。米国留学を通じて、次の二つの理論的枠組みを獲得している。

第一に、西洋文明と東洋文明を比較し、日本人の生き方を捉える視点である。大迫は、西洋人が実際的、意的・現実的で、東洋人は詩的、情的・空想的であるとする。人間本位の西洋人は、意的であるため、何事も改革、進歩、抑制ということに注意し、規律秩序が自ら行われる。これに対して、東洋人は、自然に準じ、有為転変の人生に即して、晏如として暮らし、流れ行く人生自体を有意義と見なす。大迫は、このように、心の働き具合の質的差異からアプローチし、西洋の「執着」と東洋の「達観」と総括した。在米生活の経験から、米国人に達観的思想はほとんどない、と判断する。そして、今日、西洋は東洋の貴重な参考書だが、決して教科書ではないとし、「西洋人は東洋人の達観を了解する事が出来ぬけれども、東洋人は西洋人の執着がわかる結果は、将来の世界的大思想、大観念は必ず東洋から生まれるであらう」[23] と結論付け、日本人の奮励を促した。大迫は、両洋文明の長短を理解しながら、西洋の単純な模倣ではない、新しい日本人の生き方を模索したのである。なお、特に、悪円満や悪達観に陥りがちな「消極主義」の東洋が、物質的文明で圧倒し、先頭を走る西洋に学ぶべき点として、「善い事ならば何でもやる。それが些細な事でも全力を傾倒してやる。困難かは知らぬが遣って見やう。失敗しても、かまわぬ、兎にも角にもやつて見る」[24] という「積極主義」を挙げた。「積極主義」は大迫の中核的思想の一つであり続けることになる。

第二に、第一次世界大戦に伴い変動する国際的情勢に関わる一国の立場から、日本の立ち位置を展望する政治的・人権的視点である。大迫は、滞在した米国の世論を共有しつつ、英国のロイド・ジョージ（Lloyd George, David）、米国のウィルソン（Wilson Harold）とルーズベルト（Roosevelt, Franklin Delano）、仏国のクレマンソー（Geoges Clemenceau）

等、世界の主要な政治家の人物論を評し[25]、国際政治への高い関心を示している。また、全ヨーロッパを戦争に巻き込んだ第一次世界大戦を、「物質文明」や「利己的国民主義」が破綻した大転機と見なした。そして、「今回の世界大戦の哲学は古今未曾有の万国心を生み出し、其意義は実に世界的デモクラシー、万国共通的民本主義を算出せんとして居るものである。此時に於てか大日本帝国たるもの、活眼を開いて斯る天下の形成を看取し利用し採用して以て世界と共に進んで止まざらん事を勉む可きではないか」[26] と力説した。そして、これ等の人物に並ぶ、我が国における国際的政治家の出現に期待している。

さらに、大迫は、米国の日本人移民排斥問題に度々言及している。彼によると、日本人の中で、最も幸福かつ最も不幸な人々は、カリフォルニア州の日本人だという。勤勉で低賃金・長時間労働を厭わない日本人は、物質的幸福を容易に手に入れる点で、幸福である。他方、白人労働者の地位を脅かし、宗教文化等の違いから、1890年代に始まるカリフォルニア州の日本人排斥運動の被害を受けているという意味で、不幸である。特に、大迫の米国留学前後の時期は、日本人の土地所有が制限される時期と重なり、排斥運動が高まりを見せていた。彼は排日問題について、「我輩は、米国人が我が日本人を軽蔑し、排斥するのに対して、義憤を発するのに、異存は勿論ないが、同時に、我等が朝鮮人や支那人等に対する時は常に、紳士的態度であつて欲しいと思ふ」[27] と所感を述べた。日本人として直面した排日問題を、普遍的な人権問題として捉え返すのである。なお、関東大震災後の社会不安を背景に、流言が広がる中で、民間の自警団や警察官等が、朝鮮人と思われる人々を暴行、殺害した事件に対する彼の鋭い批判は、同じ文脈で理解できるだろう。

このように、大迫は、米国留学の経験から、西洋・東洋文明を比較する中で、日本人の生き方を理解し、また、大規模な総力戦となった第一次世界大戦の経験を背景に、グローバルな政治的・人権的意識を深めた。こうした理論的枠組みから、社会教育論を形成していくのである。

Ⅲ　大迫の社会教育論の特質

①　デモクラシーと社会教育

第一次世界大戦中に世界的に高まりを見せたデモクラシーの気運と、民本主義等を指導理論とする我が国における民主主義的風潮の広がりは、米国の現地で見聞を広め、帰国した大迫の社会教育論に影響を与えている。大迫は、5本の指は、それぞれ働きが違うが、全て必要であるように、人間も同様だとし、「5本の指主義」の自説の中で、次のように、デモクラシーを説明する。「五人居れば五人共、人格を備えて居る。其人格には色々の相違はあらうけれども、同じく人格である。彼が尊く、此れが卑しいと云ふ区別はない。あれは上等の人格で、此は下等の人格だと云ふ事は出来ない。人格は平等でなければならぬ。デモクラシー

の根底もここにある。即ち、デモクラシーも此人格主義を以つて其本体とするのである」[28]。このデモクラシーの把握は、男女は共に尊いとする「男女平等」論や、「皆なそれぞれ各々異なつた仕事に従事すればこそ、社会が円満に発達して行くのである。皆ななくてはならぬ大切なものである。どれも尊いのである」[29] と見る「職業神聖論」、また、デモクラシーは、縦・上下に観察しない「横の文明観」であって、資本家と労働者、白人人種と黄色人種等は、全て対等である、とする指摘、さらに、「役人あり、商人あり、百姓あり、教師あり、生徒がある。然かも一団となつて、社会を形成して行く時には、心を合せて其職業を完ふする」という「共働主義」[30] とも一体的に論じられている。大迫は、デモクラシーが、このようにして、個人と社会に幸福をもたらす、と考えた。

なお、大迫は、第一次世界大戦後の新たな思潮として、「人格主義」とともに、「社会共同連帯主義」をあげている。「吾々の日常の生活振りを見ますと、どうしても吾々日本人が欧米人に一歩譲ると思われる所があります。それは彼等欧米人は共同生活、社会生活といふ点に余程訓練されて居ると云ふことであります。我日本人は国家の為に一旦緩急ある場合には、犠牲、奉仕の精神を発露して奮闘するのでありますが、日常平時の場合に於て自分社会の一員であるといふ意識がどうも弱いやうであります」[31] と述べている。社会生活がなければ、人格主義が利己主義と変わらなくなってしまう。縦の文明であるアリストクラシーを引き倒し、新しいデモクラシーの文明を打ち立てるための社会意識の向上を主張するのである。

大迫が、第一次世界大戦後の日本の課題を見た、デモクラシーの本体である人格主義を基礎とする新しい社会は、個人の価値とともに、円満な共同生活を送るための社会意識を求めるものであった。個人が他人の奴隷となるアリストクラシーの文明と異なり、独立の精神や自治の観念を持つ個人が、社会を作ることは、非常に困難である。こう考えた彼は、「社会生活を営む上に於て、如何なる教育を施すべきかと云ふことが、即ち社会教育と云ふことになつて来る」[32] と論じ、個人生活と社会生活を統合する点に、社会教育の意義を見出したのだった。

② 学校教育批判と社会教育の固有性

大迫が、社会教育を論じる問題意識には、日本の学校教育に対する鋭い批判があった。その際の主な論点は、次の三つである。

第一に、学校教育の偏知主義である。大迫は、学校が死んだ知識の教授に腐心し、学問の持ち主である肉体を忘却しているとし、次のように欠点を批判する。「いくら地位があり、学問があり、巨万の富があつても溌剌たる健康がなかつたならば何の喜びがあらう。何の幸福があらう。何の楽しみがあらう。一体日本人位肉体を粗末にする国民はない様に思はれる。病気になつても、否死んでも学校でよい成績をとればよいといふ風である」[33]。そして、大迫は、「米国学生のいずれもが筋肉隆々たる体格を有し、溌剌たる生気をたたへて居るのには、実に心細い感を抱かざると得なかつた」[34] という留学時の寄宿舎での体験も回想し、食

事や睡眠の問題を含めながら、生涯にわたる体育を強調した。大迫は、体育を最も重視する社会教育論を堅持した。

第二に、初等教育から大学教育までを通じた、教育における生活の欠落である。大迫は、日本の教育が、「学問を教へて生活を教へない、機械を作つて人間を作らない、生きた自治独立の確信ある人間を作らずして、物知りを作る。－命の無い機械を作る」[35] と指摘する。この議論の背景には、東京市労働課長時代の経験があった。職業紹介所に来る中学校卒業以上の者に、体裁のよい月給の取れる勤務先を好む傾向があり、根本的に一生を築こうとする勇猛心がなく、独立という考えがほとんどない、と疑問視していた[36]。こうしたことから、形式教育ではなく、覚悟と確信があり、人生や生活に結び付いた教育観への転換を強く訴えたのである。

第三に、立身出世教育の根底にある誤った職業観である。従来の立身出世教育は、地位や名誉を目的とするものであり、その結果、生徒の空想を煽って、虚名に憧れる人間を作り、後は顧ない。これに対して、大迫は、職業を平等に見ることが、本質的な見方であるとし、「大金持にならずとも位人臣を極めずとも学問は浅くとも各々己の職業に向つて真剣に全力を傾注することの出来る立派な人間を作るのが教育の目的でなくてはならぬ」[37] と力説する。これは、先述した「人格主義」における「職業神聖論」のアプローチによる、学校教育改革論の性格を持っている。

以上の社会教育の論理を深めつつ、大迫は、次のように、社会教育の実践的議論を展開する。「社会教育とは何か。詳論する事は出来ないが、一口に、学校の教育が学校を相手にし其生徒を教育するが如く、社会教育は社会を一個の学校と見て、之に住んで居る人々に教育を施さんとするものである。それであるから社会教育は其範囲極めて広範なものである」[38] と把握した上で、体育、知育、情育、意育及び徳育という五つの内容を提示した。体育は、子どもや若者のすることとしか考えない日本人が、何よりも先に注意を払うべきもので、先述の通り、最も優先順位が高い。また、文明の利器を発明する世界の先進国の人々の知識をお手本とする知育や、粗野で乱暴な日本人の情を、一段と麗しいものにする情育の必要も訴える。「社会教育の立場から見ると、人生に娯楽、趣味の生活を与へんと云ふことは非常に大切なることで、それが為め生活をして円満ならしめ、深刻ならしめ、優美ならしめるのである」[39] と、しばしば情育へも言及する。さらに、改革や断行ができない日本人の意志を、宗教や修養団体等を活用して、強固にするのが、意育である。以上の4つの訓練の後、「己が正当な権利を主張すると同時に、なすべき義務は必ず之を尽し、互ひに共同の利害を念として進む」[40] という自治を行う社会生活に必要となるのが、徳育である。

このように、デモクラシーを人格主義と捉えた大迫は、最初に、個人生活と共同生活の統合に、社会教育の価値を定めた。そして、偏知主義の日本の学校教育の課題を指摘し、社会教育課長の立場から、もう一つの教育分野として、体育を筆頭に5つの内容から成る実践的

議論も展開し、社会教育の固有性に言及したことがわかった。

③　**現在主義と青年教育**

大迫の社会教育論は、一生涯を視野に入れていたが、常に青年の存在を念頭に置いた。彼の捉える青年教育の課題は、次の二点だった。一つは、過度の未来志向である。「此迄の東洋の教育は徒らに青年の将来を祝し過ぎ将来に期待し将来に花を持たせ過ぎた結果、多くの青年は掐掐相率て大言壮語の徒となるか、空想を喜ぶ者となつて、現在の大切なるを打忘れ、青年時代を空費して、遂ひに一生なすなきに終わらざるを得なかつた」[41] とし、青年は、立身出世のために手段を犠牲にするが、その多くが、目的を達成できない現状を憂慮している。また、東洋の修養の性格について、「天下国家を論じ、忠君愛国を高潮するのもよい。大死一番、大悟徹底を説くのも差支へはない。社会奉仕、寒中水浴、梅干主義を鼓吹するのも亦悪くはない。乍併、之等をして実生活に即せしめ、各自は己が立場に徹底し、日常平凡の生活を深化せしむるに非らざれば、徒に外観美にして内容空虚、結局は無用の長物に終わらざるを得ない」[42] とも記し、実生活と統合されない限界を論じた。

そこで、大迫が高唱するのが、常に最善を尽くし、現在に対処する「現在主義」である。この考えの要点は、三つにまとめることができる[43]。一つ目は、最善の将来を獲得するには、その準備のための最善の現在が必要となること。二つ目は、現在を単なる将来の手段と考えずに、現在を将来の観念から引き離し、独立した無限の価値があると見なすこと。そして、第三に、唯一の足場は、現在以外にはなく、現在を一切万事を生む力と捉えることである。この「現在主義」は、たしかに、目的に向けて努力はするが、現在に無限の価値を見出す点で、明治以来の立身出世主義と異なる。また、足元の生活を重んじる点で、親に孝に君に忠にと説く「縦の道徳」[44] とも区別される。このようにして、大迫は、社会教育の立場から、従来の青年教育の形式性の克服を試みたのである。

大迫の「現在主義」の主張は、非常時の青年教育の議論につながる時代的制約を抱えていた[45]。しかしながら、米国留学の経験で得た理論的枠組みの下で、デモクラシーを人格主義と捉えた大迫は、個人生活と共同生活を統合する点に、社会教育の価値を見出した。そして、東京市の社会教育の責任者の立場から、東洋の修養の限界、我が国の教育の偏知主義や立身出世主義の問題点を指摘しつつ、社会教育の固有性を大胆に探究し続けた社会教育史的意義は大きい、と考える。

おわりに

以上、本研究は、1910年代後半から1920年代前半にかけての慶應義塾大学教授並びに東京市社会教育課長時代における大迫の著書・論稿について、米国留学の影響やデモクラシーの理解を中心に検討し、社会教育論の全体像を明らかにした。最後に、大迫の社会教育論の基

本的性格を整理することで、まとめに代えたい。

第一に、大迫が、米国コロンビア大学の留学で得た見識と経験が、その後の社会教育を論じる理論的枠組みとなった。達観と執着、消極主義と積極主義、東洋文明と西洋文明の比較や、カリフォルニアの日本人移民排斥問題に対する人権的意識は、日本人のあり方を広い視野から捉え直し、社会教育を論じる理論的枠組みとなった。大迫の議論が、グローバルな社会教育論の特質を持つのは、留学の経験とその理論的反映によるところが大きい、と考える。

第二に、第一次世界大戦後の国際的思潮であるデモクラシーを重視した彼は、その本質を人格主義と理解し、個人生活と社会生活の統合に、社会教育の価値を定めた。そして、学校教育の問題点を把握し、体育を筆頭とする等の実践的議論を展開しながら、社会教育の固有性を見出していった。「5本の指主義」の自説は、慶應義塾大学教授時代に公にされており、社会教育論の中核にある人格主義の理念は、社会教育課長就任前に既に準備されていたことになる。関東大震災後の朝鮮人虐殺事件における日本人の醜態に対する批判は、人格主義に基づく反応と解される。

第三に、大迫は、青年教育における「現在主義」を主張した。修養の生活化について、彼は、次のように強調する。「修養は必ずその人自身が身を挺して掴むべき生産であるのだ。吾々の日常の生活をして深からしめ、強からしめ、清からしめ、熱有らしめること、従つて各自が己れの職務に忠実に努力する事を外にして、いづこに真の修養があるか」(46)。生活と距離があり、「縦の道徳」や立身出世主義に陥りがちな東洋の修養・教育のあり方を批判し、西洋の長所とかねてより評価していた「積極主義」を青年教育に適用したのである。平時と戦時の明確な区別がない点に留意する必要はあるが、青年の日常的立場を重んじる新しい大胆な教育の主張であった。

ところで、大迫が中心となって開発した社会教育事業の一つに、中小商工業の従業員を対象とする公休日を利用した「商工青年修養会」がある。彼は、その構想について、次のように記している。「店員の学問は決して出世の道具ではない。自分の仕事の必要の為にするのである。仮に各学科を一より十まで学ぶ要もない。自分が好きと感じ必要と思つた科目を選べば宜い。数学だけを修めても宜く、或は簿記を学んでも差支へない。而して余力あらば更に勉学を進るも大に宜い。只経験も常識も何もかも度外視する学問万能の流弊は定員の深く戒むべきことで、教育の任に当る者も大に反省せねばならぬことである」(47)。1922年に発足したこの事業は、1943年まで継続し、戦後は「商工青年文化教室」として復活し、大迫が亡くなる二年前まで続いた(48)。長期にわたる実用化を果たした観点からも、大迫の社会教育論の歴史的意義が認められる、と考える。

附記）大迫の論稿の調査・発掘にあたって、宗教法人道会にご支援とご協力をいただきました。深く感謝申し上げます。また、本研究は、JSPS科研費 19K02459の助成を受けたもので

す。

注・引用文献

(1) 中央教育審議会「人口減少時代の新しい地域づくりに向けた社会教育の振興方策について（答申）」2018年。

(2) 新海英行「社会教育研究45年―現代社会教育の歴史的特質の解明を目指して―」『名古屋柳城短期大学研究紀要』第38号、2016、13-16頁。

(3) 新海英行他「戦間期社会教育史研究（5）―川本宇之介を中心に①―」（日本社会教育学会第46回研究大会・自由研究発表資料）、1999年9月、小括1-2。

(4) 中山弘之「川本宇之介における『都市教育』論・研究と社会教育」『社会教育研究年報』第15号、2001年、213頁。

(5) 小川利夫「社会教育行政論の形成―“現代的”意義とその内在的矛盾の動態―」小川利夫・新海英行編『近代日本社会教育論の探究―基本文献資料と視点―』（「社会教育基本文献資料集成」別巻）、大空社、1992年、144-145頁。

(6)「大迫元繁」『日本人名大辞典』講談社、2001年、電子資料（Japan Knowledge）、2019年9月2日参照。

(7) 大迫元繁「世界創造の歓喜に燃えよ」『実業之日本』第27巻第1号、1924年。

(8) 琴秉洞「解説―戦前編Ⅰ―」琴秉洞編・解説『朝鮮人虐殺に関する知識人の反応１』（関東大震災朝鮮人虐殺問題関係史料Ⅲ）、緑蔭書房、1996年、11頁。

(9) 大迫元繁「新時代の社会事業」『社会事業』第6巻第12号、1923年。

(10) 辻浩「社会『福祉教育』論の生成」小川利夫・新海英行編『近代日本社会教育論の探究―基本文献資料と視点―』（「社会教育基本文献資料集成」別巻）、大空社、1992年、76頁。

(11) 慶応義塾150年史資料集編集委員会『教職員・教育体制資料集成』（慶応義塾150年史資料集2：基礎資料編）、慶應義塾、2016年、285頁。

(12)「大迫元繁」『第14版大衆人事録東京編』帝国秘密探偵社、1942年、203頁。

(13)「名誉賞経済局長大迫元繁」『東京市公報』号外、1941年10月1日、1頁。

(14) 大迫元繁「『大野間』清治先生を語る」『雄弁』第25巻第4号、1934年、140頁。

(15) 大迫元繁「大供主義」『道話』第99号、1919年、20-25頁。

(16)「『道会』と『道の会』」『道話』第47号、1917年、67頁。

(17) 大迫元繁「西洋の執着と東洋の達観」『道』第114号、1917年、37頁。

(18)「彙報」『道話』第79号、1919年、64頁。

(19) 大迫元繁「『道話』と別るるの記」『道話』第128号、1921年、64頁。

(20) 大迫元繁「西洋の執着と東洋の達観」『道』第114号、1919年、34頁。

(21) 大迫元繁「他山の石―米国の思出―」『都道府県展望』創刊号、1958年、56頁。

(22) 大迫元繁「更生健康道の新提唱」『実業之日本』第36巻第7号、1933年。

(23) 大迫元繁「西洋の執着と東洋の達観」『道』第114号、1917年、36頁。

(24) 大迫元繁「積極主義」『道話』第118号、1921年、19頁。

(25) 大迫元繁「大宰相ロイド・ジョージ論」『道』第128号、1918年、「哲人大統領ウィルソン論」『道』第130号、1919年、「巨人ルーズベルト論」『道』第131号、1919年、「仏国首相クレマンソーの人物論」『道』第132号、1919年。

(26) 大迫元繁「世界の悔改―自力のニーチエより信仰のルーテルへ―」『道』第116号、1917年、31頁。

(27) 大迫元繁「排斥の苦を嘗めつつある米国加州の日本人」『道』第149号、1920年、27頁。

(28) 大迫元繁「『五本の指主義』の説」『道』第140号、1919年、31頁。

(29) 同上、33頁。

(30) 同上、34頁。

(31) 大迫元繁「欧米大戦と現代思潮」『道』第159号、1921年、45頁。

(32) 大迫元繁「社会生活と社会教育」『社会事業』第5巻第6号、1921年、492頁。

(33) 大迫元繁「学校教育の社会生活化―教育を生活にまで―」『小学校』第35巻第8号、1923年、56頁。

(34) 大迫元繁「運動生活化の宣伝」『実業之日本』第25巻第21号、1922年、25頁。

(35) 大迫元繁「学校教育の社会生活化―教育を生活にまで―」『小学校』第35巻第8号、1923年、56頁。

(36) 大迫元繁「職業紹介より観たる社会人心の諸相」『道』第150号、1920年、38頁。

(37) 大迫元繁「学校教育の社会生活化―教育を生活にまで―」『小学校』第35巻第8号、1923年、58頁。

(38) 大迫元繁「社会教育の要領」『道話』第126号、1921年、16頁。

(39) 大迫元孳「新生活の創造」『最近思潮教育講習録』(小学校冬季増刊)、同文館、1923年、53頁。

(40) 大迫元繁「社会教育の要領」『道話』第126号、1921年、20頁。

(41) 大迫元繁「現在主義の新生活を提唱す」『実業之日本社』第25巻第10号、1922年、13頁。

(42) 大迫元繁『青年に訴ふ』実業之日本社、1923年、20-21頁。

(43) 大迫元繁『青年礼賛』文省社、1924年、1-27頁。

(44) 大迫元繁「社会教育と子供」『幼児教育』第23巻第2号、1923年、50頁。

(45) 大迫元繁「今日礼賛―青年と非常時―」『実業之日本』第38巻第2号、1935年、26頁。

(46) 大迫元繁「あらゆるものの生活化」『道』183号、1923年、30-31頁。

(47) 大迫元繁「店員修養娯楽の設備方法」『実業之日本』第24巻第10号、1921年、13頁。

(48) 関直規「両大戦間期の公休日利用問題と商工従業員の社会教育―東京市の『商工青年修養会』の試みに着目して―」『日本社会教育学会紀要』№45、2009年、11-20頁。

大迫元繁の著書・論稿一覧

著書

№	書名	出版社（発行所）	ページ	発行年月	肩書・備考
1	青年に訴ふ	実業之日本社	全332	1923年3月	
2	新忠義道（日本帝国の堅実味、東京市社会教育叢書、第3集）	東京市	51～70	1923年7月	紀元節祝賀講演会の演説筆記
3	現代生活の三大急所（大正維新と青年再版）	三光閣	63～80	1923年4月	青年向上会夏期講習会の講演要旨、東京市社会教育課長・東京市連合青年団常務理事
4	青年礼賛	文省社	全275	1924年10月	『青年に訴ふ』を修正・改題したもの
5	高山君の送別会にて（式辞挨拶十分間演説集）	大日本雄弁会講談社	73～76	1930年10月	前宮崎市長
6	独立前後のビルマ（宝庫ビルマの実情）	牧書房	29～55	1944年5月	ビルマ事情講習会講演要旨、陸軍司政長官

論文

№	論文名	誌名・巻号	ページ	発行年月	肩書・備考
1	フロリダに武雷安氏を訪うて	雄弁、第7巻第8号	96～105	1916年7月	在米国
2	廿世紀の大山賊狩り	実業の世界、第13巻第5号	39～46	1916年7月	在米国
3	米国学生大会	開拓者、第11巻第10号	92～95	1916年10月	紐育市
4	西洋の執着と東洋の達観	道、第114号	30～37	1917年8月	マスター・オブ・アーツ
5	世界の悔改	道、第116号	27～33	1917年10月	
6	日本道徳の美点及長所	道話、第79号	37～43	1917年11月	
7	宅の子供は馬鹿です？	道話、第82号	40～45	1918年2月	
8	眠、食、笑	道話、第84号	47～55	1918年4月	
9	しかたがない	道、第120号	37～41	1918年4月	
10	桑港から横浜まで	道話、第85号	37～44	1918年5月	
11	米国の子供の立場と日本の子供の立場	道話、第88号	37～43	1918年8月	
12	偉大なる瞬間	道話、第89号	41～46	1918年8月	
13	誰か霊界の正位に立つ者ぞ	道、第125号	46～51	1918年9月	慶應義塾大学教授
14	大宰相ロイド・ジョージ論	道、第128号	39～45	1918年12月	慶應義塾大学教授
15	活気ある生活振り	道話、第93号	41～47	1919年1月	慶應義塾大学教授
16	哲人大統領ウィルソン論	道、第130号	26～37	1919年2月	慶應義塾大学教授
17	日本は美しい詩の国	道話、第96号	16～20	1919年4月	慶應義塾大学教授
18	人間の真の姿	道話、第97号	15～19	1919年5月	慶應義塾大学教授
19	大供主義	道話、第99号	20～25	1919年7月	慶應義塾大学教授
20	巨人ルーズベルト論	道、第131号	30～35	1919年3月	慶應義塾大学教授
21	仏国首相クレマンソーの人物論	道、第132号	34～38	1919年4月	慶應義塾大学教授
22	神の治療法	道話、第101号	9～14	1919年9月	慶應義塾大学教授
23	大自然の呼ぶ声	道、第137号	21～25	1919年9月	慶應義塾大学教授
24	待て暫し何たる麗しき光景ぞや	道話、第102号	27～31	1919年10月	慶應義塾大学教授
25	或る人々の修養談	道話、第103号	9～14	1919年11月	慶應義塾大学教授
26	五本の指の説	道、第140号	29～34	1919年12月	慶應義塾大学教授
27	世界思潮管見	道、第143号	34～41	1920年3月	慶應義塾大学教授
28	歩に非ず走るに非ず飛ぶなり	道話、第107号	22～28	1920年3月	慶應義塾大学教授
29	所感二則	道話、第109号	12～16	1920年5月	
30	不景気と精神修養	道話、第112号	9～13	1920年8月	
31	富士は見やうがある	道話、第113号	29～34	1920年9月	
32	排斥の苦を嘗めつつある米国加州の日本人	道、第149号	22～29	1920年9月	
33	社会人たるの自覚	道話、第115号	12～16	1920年11月	東京市労働課長
34	中央職業紹介所より見たる社会人心の諸相	道、第150号	35～41	1920年10月	東京市中央職業紹介所長
35	米国加州の排日に就て	道、第152号	27～35	1920年12月	
36	積極主義	道話、第118号	18～22	1921年1月	東京市労働課長
37	職業神聖	道、第154号	33～41	1921年2月	東京市職業課長
38	積極主義	国民体育、第7巻第3号	14～15	1921年3月	東京市労働課長
39	細民生活の研究	道話、第121号	24～31	1921年4月	東京市社会局労働課長
40	汝の宝刀の切味如何	道、第156号	27～30	1921年4月	
41	店員の修養娯楽機関設備方法	実業之日本、第24巻第10号	10～13	1921年5月	東京市労働課長
42	死の誘惑に負けるな	道話、第124号	9～14	1921年7月	東京市社会教育課長
43	欧州大戦と現代思潮	道、第159号	39～48	1921年7月	東京市社会教育課長
44	若き米人の夏季休養法	実業之日本、第24巻第15号	7～10	1921年8月	東京市社会教育課長
45	労資両者は誠意を披瀝せよ	実業之世界、第18巻第8号	58～59	1921年8月	東京市社会教育課長
46	社会生活と人格主義	小学校、第31巻第12号	2～4	1921年9月	東京市社会教育課長
47	社会生活と社会教育	社会事業、第5巻第6号	27～34	1921年9月	東京市社会教育課長
48	日本青年を毒する二つの偶像	実業之日本、第24巻第17号	41～43	1921年9月	東京市社会教育課長
49	社会教育の要諦	道話、第126号	14～21	1921年10月	東京市社会教育課長
50	我国女工の実際と其保護	道話、第127号	19～26	1921年11月	東京市社会教育課長
51	日本の現社会に対する余の熱望「人間の再生」	実業之日本、第24巻第22号	33～35	1921年11月	東京市社会教育課長
52	「道話」と別るるの記	道話、第128号	63～65	1921年12月	東京市社会教育課長
53	本誌募集中「青年の歌」に対する私の註文	実業之日本、第25巻第4号	38～39	1922年2月	東京市社会教育課長
54	満天下の青年に現在主義の新生活を提唱す	実業之日本、第25巻第10号	11～13	1922年5月	東京市社会教育課長
55	東京青年の責任	東京の青年	3	1922年6月	東京市連合青年団常務理事
56	新人の提唱す「新忠義道」	実業之日本、第25巻第13号	88～93	1922年7月	東京市社会教育課長

57	夏と青年	東京の青年	2	1922年8月	東京市連合青年団常務理事
58	大乗的に奮闘の人へ	東京の青年	3	1922年9月	東京市連合青年団常務理事
59	社会改良の第一義と林間修養会の使命	調和、第135号	36～40	1922年9月	東京市社会教育課長
60	青年よ積極第一主義に生きよ	実業之日本、第25巻第18号	28～32	1922年9月	東京市社会教育課長
61	青年の歌	調和、第136号	19～24	1922年10月	東京市社会教育課長
62	青年の本領	東京の青年		1922年11月	東京市連合青年団常務理事、東京市連合青年団『増補青年団施設要綱』1930年、175～179頁に収録。
63	運動生活化の宣伝	実業之日本、第25巻第21号	23～27	1922年11月	東京市社会教育課長
64	現代指導者の風格	道、第176号	38～44	1922年12月	東京市社会教育課長
65	日本人の引込思案	大横浜、第19巻、第12号	40～43	1922年12月	
66	新時代の社会事業	社会事業、第6巻第12号	29～32	1923年3月	東京市社会教育課長
67	我等いづこに行く可き乎	調和、第139号	23～29	1923年1月	東京市社会教育課長
68	社会教育と子供	幼児教育、第23巻第2号	48～50	1923年2月	東京市社会教育課長
69	如何にして世に乗出すべきか	調和、第142号	15～21	1923年4月	東京市社会教育課長
70	この理解ある者は真剣となり熱誠湧く	実業之日本、第26巻第7号	8～13	1923年4月	東京市社会教育課長
71	模範青年表彰式に臨みて	雄弁、第14巻第4号	222～227	1923年4月	東京市社会教育課長
72	感激の泉涸れたり日本国民	雄弁、第14巻第6号	32～35	1923年6月	東京市社会教育課長
73	救世軍の権威山室軍平氏	雄弁、第14巻第6号	93～95	1923年6月	東京市社会教育課長
74	あらゆるものの生活化	道、第183号	28～34	1923年7月	東京市社会教育課長
75	学校教育の社会生活化（教育を生活にまで）	小学校、第35巻第8号	55～58	1923年7月	東京市社会教育課長
76	精神革命の秋	道、第186号	48～50	1923年12月	
77	新生活の創造	最近思潮教育冬季講習録	397～462	1923年12月	東京市社会教育課長
78	精神的復興の急務	日本警察新聞、第590号	2	1923年12月	東京市社会教育課長
79	須らく創造者たれ	日本警察新聞、第591号	2	1924年1月	東京市社会教育課長
80	所有者たるより創造者たれ	実業公論、第10巻1月号	9～10	1924年1月	東京市社会教育課長
81	打出の小槌のやうな生活	よろこび、第2巻第1号	19～23	1924年1月	東京市社会教育課長
82	世界創造の歓喜に燃えよ	実業之日本、第27巻第1号	17～23	1924年1月	東京市社会教育課長
83	御母様とも呼たき婦人	婦人倶楽部、第5巻第1号	30～31	1924年1月	東京市社会教育課長
84	汝の立てる所を深く掘れ	雄弁、第15巻第2号	27～29	1924年2月	
85	市民生活の機関を完備せしめよ	実業之世界、第21巻第2号	19～20	1924年2月	東京市社会教育課長
86	山登りの説	よろこび、第2巻第7号	18～20	1924年8月	
87	若き妻の心得べき夫待遇法	婦人倶楽部、第5巻第8号	32	1924年8月	東京市社会教育課長
88	欧米視察者送別会席上にて	雄弁、第17巻第1号	400～402	1926年1月	宮崎市長
89	ままになる世の中	実業之日本、第30巻第15号	50	1927年8月	前東京市社会教育課長
90	私は何故饅頭屋を始めたか	実業之日本、第31巻第21号	44～46	1928年11月	前宮崎市長
91	市長から饅頭屋になつた私の所感こだはらない生活	主婦の友、第12巻第12号	39～41	1928年12月	饅頭屋欣多櫻主人
92	こだはらない人生	実業之日本、第32巻第3号	39～41	1929年2月	
93	心の変化は境遇を変化す	雄弁、第22巻第10号	79	1931年1月	
94	赤裸のアメリカを視る	実業之日本、第35巻第19号	152～155	1932年10月	米国
95	加州サンルイスの野菜王江藤為治氏	実業之日本、第35巻第21号	62～65	1932年11月	在米
96	「更生健康道」の新提唱	実業之日本、第36巻第7号	102～107	1933年4月	在米国
97	「更生健康道」の新提唱	実業之日本、第36巻第8号	74～77	1933年4月	新帰朝者
98	「更生健康道」の新提唱	実業之日本、第36巻第11号	68～71	1933年6月	新帰朝者
99	万年青年であり得る法	実業之日本、第36巻第12号	80～82	1933年6月	
100	「大野間」清治先生を語る	雄弁、第25巻第4号	138～143	1934年4月	
101	今日礼賛　非常時と青年	実業之日本、第38巻第2号	26～29	1935年1月	東京市市民館館長
102	質問に立往生	雄弁、第26巻1月号	270～271	1935年1月	東京市大塚市民館長
103	賀川君のことども	雄弁、第26巻9月号	14～15	1935年9月	淀橋区長
104	人生道場のチャンピオン	雄弁、第27巻6月号	303～304	1936年6月	東京市淀橋区長
105	お正月の餅が小さい	婦人倶楽部、第18巻第11号	303～304	1937年9月	淀橋区長
106	市民の総動員に就て	東京市町会時報、第2巻第7号	33～37	1938年	東京市市民動員部長
107	人の世に苦労はない	実業之日本、第41巻第1号	60～63	1938年1月	
108	空襲下における都市の防衛に就て	帝都消防、第14巻第101号	12～15	1938年7月	東京市市民動員部長、東京市理事、東京消防研究会講演要旨
109	勝鬨橋の開通と東京港	東京港、第4巻第5号	3	1940年6月	東京市港湾局長
110	東京高雄間定期客船航路開通に就て	東京港、第5巻第3号	2～3	1941年3月	東京市港湾局長
111	東京湾の過去を顧みて将来を想ふ	港湾、第19巻第6号	1～2	1941年6月	東京市港湾局長
112	東京開港まで	東京港、第5巻第5号	2～3	1941年6月	東京市港湾局長
113	鼎談　戦争とサラリーマン生活（出席者高橋弥太郎、河路寅三）	実業之日本、第45巻第2号	52～57	1942年1月	東京市経済局長
114	開港するまでの追想	東京港、第6巻第3号	21～24	1942年3月	東京市経済局長
115	回想の人々	東京港、第6巻第5号	15～18	1942年5月	東京市経済局長
116	建設途上のビルマ	南洋、第30巻第8号	2～5	1944年8月	前陸軍市政長官
117	アメリカの学生気質	実業之日本、第49巻第2号	47	1946年2月	東京都水産業会会長
118	さかな談義	実業之日本、第49巻第9号	52～53	1946年9月	東京魚類統制株式会社会長
119	ハガキ回答私の住ひ	実業之日本、第50巻第8号	26	1947年8月	水産物統制会社会長
120	顔をひろくする法	オール生活、第7巻第5号	16～17	1952年5月	全国知事会事務局長
121	わが国地方制度改革の方向について	都市問題、第44巻第1号	112～120	1953年1月	全国知事会事務局長
122	他山の石米国の思出	都道府県展望、創刊号	56～57	1958年9月	全国知事会事務局長

Motoshige Osako's Theory of Social Education: His Overseas Studies in America and Reception of Democracy

SEKI, Naoki

Abstract:

This thesis was undertaken to discuss the development of Motoshige Osako's theory of social education from the late 1910s to the early 1920s. To accomplish this purpose, this thesis primarily focuses on his oversea study in America and his reception of the concept of democracy. He resigned his position as a Professor of English at Keio University and took up the designation of the head of the social education section of Tokyo. His articles and books were collected and analysed by the author of this thesis, and the following results are derived from the investigation.

First, Osako went to America and studied at Columbia University. His observations and experiences at the university helped him in developing the theoretical framework through which he described social education.

Second, he attached great importance to democracy and understood that personalism was the essence of democracy. Further, he also cognised the reason for the existence of social education in integrating individual and social lives. He discovered the inherent nature of social education and elucidated several problems pertaining to school education.

Third, he asserted that the youth should always do their best. He criticized the spiritual advancement of the Orient, which was contrary to real life, and advocated the application of positivism, which was the best viewpoint of the West, to youth education.

Recently, the role and uniqueness of social education is being questioned. However, Osako's theory of social education adopts an international perspective and offers suggestions that are valuable for our increasingly globalising world.

Keywords: Motoshige Osako, positivism, personalism, democracy, Professor at Keio University, head of the social education section in Tokyo